

# 記述することの空白： 『ブリタニカ百科事典』の描くハワイ

石倉和佳

## 1. はじめに

18世紀後半から19世紀前半にかけてのイギリス・ロマン主義期には、多くの百科事典が発行された。イギリスにおける百科事典の嚆矢は、1728年に初版が発行されたイーフレ임・チェンバーズ(Ephraim Chambers, 1680?-1740)の『サイクロペディア』(*Cyclopaedia, or an Universal Dictionary of Arts and Sciences, 2vols*)である<sup>1</sup>。1771年、スコットランド啓蒙思想の一つの活動として発刊された『ブリタニカ百科事典』(*Encyclopaedia Britannica*)の初版は、チェンバーズに倣った2巻本のコンパクトなものであった。『ブリタニカ』はその後何度も改版され、19世紀にはいると20巻を超える大部の百科となり、19世紀後半にはイギリスを代表する百科事典として確固たる評価を得るようになった。詩人のS. T. コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)が序文を書き編集方針を示した『メトロポリターナ百科事典』(*Encyclopedia Metropolitana*, 1817-1845)は、知識の相互関係を重視したアルファベット順でない編集形態を採用したもので、初版が30巻、第2版は42巻から構成される大部なものであった。この百科事典はその後改訂されることがなかったが、その学術的な質の高さについては一定の評価を残した。「有益な知識の普及のための協会」(The Society for the Diffusion of Useful Knowledge, 1826-1848)が自学者に向けて発行した『ペニー百科事典』(*Penny Cyclopaedia*)や『ロンドン百科事典』(*London Encyclopedia*)など、その他にも様々な百科事典が出版されていった。

ロマン主義期に起こった百科事典の出版競争の背景には、出版者間の商業的な利益追求競争があった。19世紀には中産階級が社会の中心的階層となって消費文化を形成し、その中で出版業界もマーケットを拡大していたのである。ただし各種の百科事典の編集や出版に関しては、出版競争や消費文化の成熟という以上に、知識を探求し、記述し、大部の書籍にまとめ上げていく営為そのものに時代精神が映されていると考えることができる<sup>2</sup>。制作者側のみならず、読者側にとっても膨大な知

識が書籍に編集されていることは、教育の機会が社会階層によってまちまちであった社会状況を考えれば、有益で自己研鑽にも資するものであった。そして知識を所有することへの意欲は、知性的な枠組みを超えた情動的な欲求をも伴っていたと考えることができる。「知は力なり」(“Knowledge is power”) とイギリスの哲学者フランシス・ベーコンの格言にあるように、イギリスの人々の知識を所有することへの欲求は「大英帝国」(British Empire)の領土的伸長と期を一にしていた。

イギリスが植民地を拡大し領土を広げる中、百科事典に採録された事項の中で、19 世紀になって最もその分量を増やしたのは地理的事項であった。ジェイムス・クック船長の 3 回にわたる世界一周航海(1768-1780)は、太平洋の地誌について莫大な情報をもたらした。それまで未知の領域であった太平洋は、クックの航海記を通じて広く知られるようになり、その後も多くの探検が行われる中で、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイなどの島々に関する情報が次々ともたらされた。しかし、ヨーロッパ人との接触によって、19 世紀の間に太平洋の島々の社会や自然は急速にその姿を変えていくことになった。太平洋を訪れた人々の旅行記や見聞録が何らかの形でまとめられ、その内容が百科事典に取り込まれ収録されるまでの時間に、太平洋の島々の人々や社会が根本的に変質しているということも珍しくなかった。19 世紀を生きるイギリスの人々にとって、英語で記述された太平洋に関する情報の信憑性は、実際には常に何らかの保留付きであったが、『ブリタニカ』のような立派な装丁で仕上げられた大部のフォリオ版の百科事典は、当代を代表する学者や専門分野の書き手を揃え、権威を帯びた知識として受け入れられることになるのである<sup>3</sup>。

19 世紀中葉まで、太平洋諸島の情報についての改訂のプロセスが分かる百科事典は『ブリタニカ百科事典』である。本論文では、19 世紀中葉までの『ブリタニカ百科事典』の各版におけるハワイの記述を辿り、その記述内容の変化を考察することで、百科事典の記述に影響していると考えられる書誌、および歴史的事実について検討する。そして百科事典に掲載された情報が、実際に手に入り得た情報の範囲から推測して、いかに誇張され、歪曲され、消去され、文飾によってさまざまな印象を加味されていたのかを考察したい。『ブリタニカ』全巻の膨大な情報と比するとハワイの記述は短い事例ではあるが、本論文の考察によって、帝国主義的な知のヘゲモニーの暴力的な一面を明らかにすることになるはずである。

## 2. 『ブリタニカ百科事典』第3版

まず最初に、『ブリタニカ百科事典』第3版(以降「第3版」と略す)の出版史を概観する。それまでの版が全面改訂された第3版は1788年から発行が始まり、1797年に完成した<sup>4</sup>。初版および同様売り上げは良く、当初の計画より巻数が増え18巻となった。この版において、百科事典の各項目が数人の著者によってすべて記述されるのではなく、その事項の専門家に依頼する形が始まったとされているが、この版ではいまだ著者の著作権が確立されておらず、個々の事項の執筆者は明記されていない。その代わりに各項目に参考文献が明示されている。第2版から引き続き、相互参照や注釈を用いる形が踏襲され、これはその後も続いた。ボリュームや体裁の面からみて、第3版はその後の百科事典の基本となったといわれており、『ブリタニカ』の初期の歴史における一つの到達点であったともいえる<sup>5</sup>。ハワイ諸島については「サンドウィッチ諸島」(Sandwich Islands)に総合的な記述がある他、「オアフ」(Woahoo)、「ハワイ」(Owhyhee)など各島についても項目が立てられている。これらの記述は皆、1から2ページの比較的短いものであり、1820年の第6版まで変更されていない。

第3版(から第6版まで)の「サンドウィッチ諸島」の項は、気候や植物、動物についての記述から始まる。ハワイの地域はカリブ地域と気候が似ているが、より穏やかであること、しかし雨が降り湿気が高いこと、野菜は他の太平洋諸島と同じようなものであるが、タロイモが甘くおいしいこと、パンノキはタヒチより茂っていないが、サトウキビは非常に大きく育つこと、豚、犬、鶏がおり、クックがヤギや豚を残していったが今はいないこと、などである。そして、この地域の人々の容姿や言語や習慣は、トンガやソシエテ諸島より、ニュージーランドに近いとも述べられている(EB, 3rd, vol.16, 649)。ハワイ島(“OWHYHEE”)の項でウィリアム・エリス(William Ellis, 1751-1785)のクック第3回航海の旅記(*An Authentic Narrative of a Voyage Performed by Captain Cook, 1782*)が言及されているとおり、この版のハワイの人々の暮らしについては主にエリスのものを参考にして記述されていると見てよい(EB, 3rd, vol.13, 572-574)。続いて、男はカヌーを作り女は衣類を作るといった男女の分業の様子から、舌の先に刺青をいれていること、様々な貝のネックレスをしていることなどが語られる。「彼らの技術の中で忘れてはならないのは塩づくりである。塩はふんだんにあり、また質が良い」(“Among their arts must not be forgotten that of making salt, which they have in great abundance, and of a good quality.”)といった記述からは、ヨーロッパの製塩技法がもた

らされる前のハワイの豊かな暮らしが垣間見える。サンドイッチ諸島の記述は次のように締めくくられる。

この島の人々が生まれつき持つ能力は、どんな点においても普通の人間の標準を下回ることはないようである。彼らが農業を発展させてきたこと、そして洗練された技術を持っていることは、彼らがおかれた状況と享受している自然の恩恵に全く即したことである<sup>6</sup>。

Their natural capacity seems, in no respect, below the common standard of mankind; and their improvements in agriculture, and the perfection of their manufactures, are certainly adequate to the circumstance of their situation, and the natural advantages which they enjoy. (EB, 3rd, vol.16, 649)

クックの航海に同行したウィリアム・エリスの名は、第3回航海の際のスケッチを残したことから今でも言及されることがあるが、彼の航海記は現在ほとんど評価されていない。クックの航海に同行した者たちが残した記録は、イギリス海軍が管理することになっており、正式な旅行記が出版されるまでは公開しない約束のものであったが、船医のアシスタント(Surgeon's mate)であったエリスはこの規約を破って金銭目的で自分の手にあった記録と記憶から旅行記を制作して出版した<sup>7</sup>。クックに同行した船医であり、若いエリスをよく知っていたデイヴィッド・サムエル(David Samwell, 1751-1798)はエリスの旅行記に最初から否定的であった。これは実際の航海で起こったことの半分も伝えていない、と述べている<sup>8</sup>。『ブリタニカ』のハワイ関係の項の匿名の著者が、エリスの航海記を参考にした理由はわからないが、出版の日程から考えて公式版を待って記述するのでは間に合わないと思われたとすれば、クック第3回航海の一番最初に出版された航海記であり再版までされたエリスの著作を利用するのはわからない事ではない。確かにエリスの航海記にはハワイの風俗や習慣がさまざまに紹介されているが、航海の旅程の把握や細部の描写には曖昧なものが多い。『ブリタニカ』第3版の「サンドウィッチ諸島」の項目は、エリスの航海記を基にした編集作業の結果、クックの船団と現地の人々との間の何らの軋轢も想起させない、なにがしか楽園の島を思わせるものとなった。その結果1820年代に至るまでの『ブリタニ

カ』のハワイの記述は、すでに失われたハワイ(もしくはハワイと人々が思ったもの)を、繰り返し語るようなものとなってしまった。

前述したように、『ブリタニカ』のハワイに関する記事は、1788年から1797年までの間に制作されたものである。第3版では、ハワイは統一されておらず、部族間の戦いが多いために島の人口が減少している、と紹介されており、諸島全体で40万人以上の人口ではないと記載されている。カメハメハ1世によるハワイ統一に至る物語は描かれず、また、人口激減がヨーロッパからもたらされた疫病と関係があることも不問に付されているわけである。また、ジョージ・バンクーバー(George Vancouver, 1757-1798)の旅行記も『ブリタニカ』の項目に実質的に生かされることはなかった。バンクーバーは、1791年から1794年にかけてのアメリカ大陸西北部の海岸線探検の際ハワイで3度冬を越している。この時、彼はカメハメハに軍事的な助言を与え、イギリスにハワイを譲渡することで保護を得るという方向を強く推した<sup>9</sup>。ロンドンでのスキャンダルのあと、バンクーバーは人々から忘れられた。ハワイの首長とイギリスの船長が友好的に現地の未来を考えることができた、という瞬間は人々の知るところとならず忘却されたのである<sup>10</sup>。

### 3. 『ブリタニカ』第4, 5, 6版と補遺版における「ポリネシア」

1801年から出版が始まった『ブリタニカ』第4版では編集者が交代し、内容にも改訂が加えられたが、ハワイに関連する事項には変更が加えられなかった<sup>11</sup>。第5版(1815-1817)は同内容のものが再版本として売り出されたが、売り上げが伸びず版權を売り払うことにまでなった。第6版(1820-1823)は、第5版のフォントを一新して再版されたものである<sup>12</sup>。『ブリタニカ』の版權を買い取ったのは、当時もっとも成功していた出版者の一人であったアーチボルド・カンスタブル(Archibald Constable, 1774-1827)である。1814年にカンスタブルは『ブリタニカ』の新しい編集者として、友人のマクベイ・ネイピア(Macvey Napier, 1776-1847)を任命した<sup>13</sup>。カンスタブルは一時代を席卷した書評誌、『エディンバラ評論』(*The Edinburgh Review*)の出版者であり、ウォルター・スコット(Walter Scott, 1771-1832)の小説の出版においても成功していた。彼は『ブリタニカ』の改訂に意欲を見せ、資力に任せた経営手法をとった。当代の有名な哲学者や科学者を筆者として招き、この百科事典を国際的に評価を得ることができるイギリスの知性の結晶とすることを目指したのである。

この試みの成果は、ネイピア編集による全 6 巻からなる大部の補遺 (*Supplement to the 4th, 5th, and 6th Editions*, 1815-1824; 以下「補遺版」とする) として実現した<sup>14</sup>。ネイピアは編集責任者となるとすぐに補遺版の執筆者の確保に取り掛かった。そして出版の際、執筆者をリスト化し宣伝に利用した。記名のある百科事典項目はこうして誕生することとなった。そして著者の側からみても、『ブリタニカ』に執筆すること、つまり第1巻の巻頭にある執筆者リストに名を連ねていることは、一流の学者や科学者の証明とも考えられたのである<sup>15</sup>。ハワイに関連する項目は「ポリネシア」(Polynesia)の項目にまとめられた。カンスタブルが学術的に優れた内容のものを目指す姿勢をとったことは、当然ネイピアの編集にも反映されていた。

「ポリネシア」の項目の執筆者としてネイピアが依頼したのは、海軍の要職を長く務め、当時王立協会の副会長でもあったジョン・バロー(John Barrow, 1764-1848)である。バローは『ブリタニカ』に多く寄稿し、ポリネシアの他には海軍関係の項目やアフリカ、中国などについて執筆している。彼は 1792 年からマカトニー大使の中国訪問に随行し、1797 年には同大使の喜望峰での総督の任務に随行した。どちらの場合も現地を調査し、のちに旅行記を出版している。その後彼はイギリス海軍と王立協会での仕事を継続しながら、著述家として活動した。補遺版に載ったポリネシアの項目が書かれた時期は明記されていないが、1819 年にカメハメハ 1 世が逝去したことが記載されていない事や、ロシア海軍の船長であるコツェブー(Otto von Kotzebue, 1787-1846)の太平洋探検記(1815-18)に掲載されたハワイ見聞の内容が利用されているという点を考えて、1818 年から 1819 年ごろの執筆かと推測できる<sup>16</sup>。長く王立協会会長を務めたジョセフ・バンクス(1743-1820)の最晩年の時期であり、王立地理学会(Royal Geographical Society)で長く重鎮として活動したバローは、バンクスに代わる海洋に関する権威ともみなされていた。バローがイギリス海軍の文書に通暁し太平洋への様々な探検を知悉していたとして、しかし果たしてハワイについて著述するもともとふさわしい人物として執筆者に選ばれたかどうかはわからない。

補遺版の項目の特徴は、大きく見て二つある。一つは「ポリネシア」という地理上の区分名を採用し、この地域区分による記述となっていることである。これは多くの太平洋の航海とその報告に触発された地理学の発展が寄与している。二つ目は、バローのハワイに関する記載内容に人種的、性的偏見が散見するということである。このことは、同時期に出版された『ロンドン百科事典』(*The London Encyclopaedia*)の記載

内容と比較しても明白である<sup>17</sup>。以下にはこれらの二点について、順に考察していきたい。

太平洋地域の島々をポリネシアと命名したのはフランスの啓蒙思想家、シャルル・ド・ブロス(Charles de Brosses, 1709-1777)である。彼は現在のポリネシアの領域に加えて、ミクロネシアとメラネシアの多くの領域を含む広大な地域を「ポリネシア」(Polynésie)と呼んだ。当時はまだクック航海の前であり、太平洋の島々についての情報は十分ではなかったと考えられる。この語の英語の初出は『オックスフォード大辞典』によると1756年とされている。その後太平洋地域の地理を「ポリネシア」という語で説明し、ポリネシアという地理的概念を一般に普及させたのは、ジョン・ピンカートン(John Pinkerton, 1756-1826)の『近代地理学』(*Modern Geography*, 1802)であると言われている<sup>18</sup>。イースター島とタヒチが独立した項目でない事を除けば、ピンカートンの取り上げている島々と海域は『ブリタニカ』とほぼ同じである。ただし18世紀の航海誌の情報をもとに簡潔に書かれており、概ね海洋上の位置や島々の地理的な記述にとどまっている。

補遺版では、次の島々が「ポリネシア」として言及されている。以下には、現在の地名、地域とともに、原文をカッコ内に明記する<sup>19</sup>。

#### 北半球(In the Northern Hemisphere)

1. マリアナ諸島(The Marian or Ladrone Islands.)
2. カロリン諸島、パラオ諸島(The Carolinas, including the Pellew Islands)
3. ハワイ諸島(The Sandwich Islands)
4. 南北半球にまたがる無数のサンゴ礁の島々(The numerous reefs and coral islands scattered over the Pacific in both hemispheres)

#### 南半球(In the Southern Hemisphere)

1. フィジー諸島、トンガ諸島(The Friendly Islands, including the group of the Tonga Islands)
2. サモア諸島(The Navigators' Islands)
3. ソシエテ諸島(The Society Islands)
4. タヒチと近隣の島々、およびピトケアン島まで伸びる広大な地域(The Georgian Islands, including Otaheite, and the great range extending as far as Pitcairn's Island.)

## 5. マルケサス諸島(The Marquesas)

## 6. イースター島(Easter Island)

第 3 版においては、それぞれの島々は別々に記載されていたが、ここでポリネシアというカテゴリーによって一つにまとめられることになったわけである。この補遺版に載ったポリネシアの項目は、その後第 7 版で加筆修正されて再度掲載されたが、上記のポリネシアの地域区分については変更がない。第 7 版のための本文改訂の時期は 1837 年ごろではないかと考えられる。それは、第 7 版ではビーグル号による海洋探検を終え帰国したチャールズ・ダーウィン(Charles Darwin, 1809-1882)についての言及が加筆され、彼が太平洋の小動物に関する情報をもたらしてくれるだろう、と書かれているためである。ダーウィンの帰国は 1836 年であった。翌年に彼は王立地理学会で研究発表をしており、航海における発見や調査の成果が公にされること awaited。補遺版の執筆時期から、第 7 版の執筆時期までの間、およそ 18 年から 19 年の期間があるわけであるが、第 7 版でハワイ諸島の項目に加筆された内容の多くは、1820 年ごろからイギリスおよびアメリカからハワイ諸島へ派遣された宣教師たちの報告によるものであった。

## 4. 『ブリタニカ』 第 4, 5, 6 版 補遺版における「サンドウィッチ諸島」(ハワイ)

次には補遺版の内容を中心に、第 7 版での改変も加味しながら、ハワイに関する掲載内容を検討したい<sup>20</sup>。まず冒頭では、「ポリネシア」が、地球上の大きな地域区分となることが語られ、その地域をオーストラリア大陸とパプアニューギニア、およびニュージーランドをむすぶ線より東および北東の領域とし、東端はアメリカ大陸までと説明している。太平洋の説明は、主にヨーロッパの人々が島々を「発見」した航海とその経緯が時系列に述べられ進んでいく。ハワイ諸島はクックが最初に発見し上陸した諸島と紹介され、彼はパトロンであったサンドウィッチ伯爵の名をとって「サンドウィッチ諸島」と名付けたこと、そしてハワイ島で命を落としたことが簡単に語られている。そこからハワイの植生や農業、そしてカメハメハ 1 世について、前述したコツェブーの旅行記に準拠した記述が続く。ハワイの人口についても言及がある。補遺版では、クックと第 3 回航海を共にしたキング船長(James King, 1750-1784)が諸島の各島々の人口を見積もった数字が載っており、第 3 版を踏襲してハワイ諸島全体で 40



万人ほどであると紹介されている。第7版ではキング船長への言及は削除され、代わりに宣教師たちの見積もった人口が掲載されている。ここでは、全体で13万人ほどとされているが、バローはこれは少なすぎるのではないかとコメントしている<sup>21</sup>。

ハワイの人々が食するものとして、バナナ、ココナツ、パンノキ、サトウキビ、ヤムイモなどが列挙され、たばこやメロンなどが新しくもたらされたと書かれている。また、ハワイの自然から採れる唯一の商品価値のあるものとして、ビャクダン(sandal wood)が挙げられている。コツエブーの見聞録から、水路でつながれ石で囲われた方形の耕地が山一面に広がり、様々な作物を育てている光景が紹介されている。また、オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズにイギリスから送られていた囚人が、ハワイの人々にサトウキビを原料とした酒造りを教えた、という話も記載されている。また、ハワイには家畜の種類は多くはなく、豚がたくさんいるが、ヨーロッパのものよりもはるかに大きく美味であるとも書かれている。このような話のあとで、カメハメハ1世がイギリスの船を改良して軍艦を作り、英国風の家を建て、ヨーロッパ人と同じ服装をしている、といった王によるイギリスに倣った軍隊や衣装の話が出てくるのである。

バローの筆には人種的偏見が見え隠れするところが多い。ハワイの人々の信仰が文明化を妨げているとし、白人による文明化を当然と考えていたようである。この文章が書かれた1820年の少し前ごろには、多くの商船や漁船の船員がハワイに住み続けるということが起こっていた。これらの人々を通じて、ハワイでは交易がおこなわれていた。そして、ハワイに定住することを決めた白人は現地人と結婚して子供を作るので、そうした混血の新しい世代がハワイの近代化を進めていくはずであるが、教育制度が発展しておらず、なにも実現していないと記述されている(Supplement, 285)。そして、この島を文明から遠ざけているのは、支配者であるカメハメハ1世が、古くからのハワイの信仰を捨てないためであり、王が死ぬときには人身御供として何人もの妻や召使が殺されるだろうとしている。「タブー」(Taboo)についても言及され、王や高貴な人々の間で信じられており、家でも豚でも人間でもタブーとされることがあり、そうなれば持ち主であっても触れたり使ったりすることができなくなるということも詳細に書かれている。こうした禁忌に関する観察はポリネシア全体でみられたが、ハワイでは特に顕著だったという(Supplement, 286)。

バローの記述で最も注意が必要なのは、ハワイの女性を殊更に汚らわしいと書いているところである。ハワイの女性のふるまいについては、夫の死を悲しむ妻や、子

供をいつくしむ母親の姿などがさまざまに報告されている中、バローの記述は特に性的な放逸、ひいては道徳性の欠如に焦点をあてている<sup>22</sup>。百科事典においてハワイの人々の性質や傾向などを語る記述として、どのような判断でこうした言及が選ばれ強調されるのか、慎重に考える必要がある。バローは次のように書く。

ハワイの女性は腐敗し蔑まれ続けている。異邦人と頻繁に交流し、そして改善がもたらされたに違いないにもかかわらず、女性は男性から評価を受ける一歩さえ踏み出しておらず、キャプテン・クックによって最初に訪問された時から粗雑さは一向に改められていないようだ。「不快なほど顕著な猥雑さ」をバンクーバーは嘆き、ポリネシア中でそれに比するものを全く見つけられなかったが、そうしたことは全く改善されなかったようである。船乗りのキャンベルがオアフ島にいた時、王の兄弟の一人が亡くなり、その時、人々の弔いの一つとして、公の売春が行われた。

...the women continue to be degraded and despised; and, notwithstanding the frequent intercourse with strangers, and the improvements which undoubtedly have been introduced, the sex do not appear to have gained a single step in the estimation of the men, or lost any part of the grossness of behavior since they were first visited by Captain Cook. That “offensively conspicuous wantonness,” which Vancouver deplures, and to which he found no parallel in the whole of Polynesia, appears to have suffered no abatement. When Campbell, the seaman, was on the island of Woahoo, the king’s brother died, on which occasion, as part of the general mourning, a public prostitution of the women took place. (*Supplement*, 285; 下線は筆者)

これらの記述は、イギリス海軍の船長であったバンクーバーの旅行記と商船に乗っていたキャンベル(Archibald Campbell, 1787-1821)の旅行記にそれぞれ言及のあるものであるが、元の旅行記の文脈をすべて消去した上で利用しているために、歪められた内容になってしまっている。続く箇所には、王の死の際の生贄として人が殺される話と、墓所(“Morai”)をけがした罪で目をえぐられた男の話がある。バローは、何らかの意図をもって読者に与える印象操作をしていると考えてもおかしくないが、ここではバンクーバーとキャンベルの記述の実際について掘り下げてみたい。

バローが「不快なほど顕著な猥雑さ」、とバンクーバーの記述として言及した箇所に対応する部分は、バンクーバーの旅行記の1792年3月の箇所である。バンクーバーと彼の船員たちの一行がハワイ諸島最北端のカウアイ島(“Attowai”)を訪れた時、現地の男性が現地の女性を売春の目的で熱心に斡旋し、それに女性たちも素早く従ってくるのを見て嫌悪感をぬぐい切れなかったことを記述している。そして彼は次のように考察する。

この小旅行で開示された過剰な猥雑さと比較できる淫らさがかつて観察したことがない。今や非常に不快なほどに顕著になったこの無遠慮さが、もしこれらの島々に私が前に来た時に明らかになっていたとすれば、そうした印象は薄れないだろうから、当初自然と生み出されただろう嫌悪感のすべてとともに今回思い出されていたに違いない。しかしそのような行為が行われた何の記憶もないので、私はこの放逸さを彼らが全く新しく身につけたのだと考えざるを得なかった。おそらく、何年間か続けてこの地に訪れた、違った文明国から来た好色の徒から、教えられたのだと。

...no indecency that ever came under my observation, would be compared with the excessive wantonness presented in this excursion. Had this levity, now so offensively conspicuous, been exhibited in my former visits to these islands, its impressions could not have been effaced, and it must have been recollected at this time with all the abhorrence which it would at first have naturally created; but as no remembrance of such behavior occurred, I was induced to consider this licentiousness as a perfectly new acquirement, taught, perhaps, by the different civilized voluptuaries, who, for some years past, have been their constant visitors (Vancouver, 2, 462; 下線は著者)

バンクーバーはクックの第2回航海と第3回航海に同行しており、第3回航海では1778年から1779年にハワイに訪れている。つまり、上記の経験はおおよそ13年後にハワイを久しぶりに訪れた際の出来事であるが、かつて訪れた際の同様の記憶が全くないというのである。つまり、13年の間にカウアイ島を訪れたヨーロッパ人が、彼らに売春を教えたのだらうとバンクーバーは結論づけている。バンクーバーのハワイの人々の観察には人種的偏見は見られない。彼が嫌悪を覚えたのは行為に対してで

あり人々に対してではない。それに比してバローは、ヨーロッパ人たち(“strangers”)との交流によって猥雑さが和らげられるはずであるといった言及からも、ヨーロッパ人が現地人を更生させるはずだといった尊大な態度が垣間見られる。このような西洋文明による未開の人々の道徳的矯正という文脈は、第7版でこの項が改訂されたとき、宣教師たちの活動とともに強く前面に出てくることになる。

バローが言及したキャンベルが目撃したハワイの人々の吊いの際の行為は、「売春」という比喻でも使う以外表現の仕様がなかった、と考えられるものである。キャンベルの旅行記は、太平洋を航海した彼が持ち帰ったメモと口述によってジェイムス・スミス(James Smith)によって書き起こされた<sup>23</sup>。スミスは語りを構成するにあたって、三人称を避け、一人称の「私」(“I”)を使っている。吊いは、ハワイの伝統的な儀式的行為によって彩られているのが分かる。

デイヴィスとともに居住していた間、王の兄弟の一人 (Terremytee) が死んだ。

(中略) この時行われた公の吊いは非常に驚くべきもので、もし目撃していなかったら信じることができなかつただろう。

現地の人々は髪を切り、全裸でそのあたりを徘徊した。多くの者が、特に女性たちは前歯を折って醜くなり、赤く熱せられた石で顔に烙印を押し、燃えているひょうたんの細くなった方の先を丸い印が付くまで顔に押し付けた。そうしている間に、一般の、もしくは、万人におよぶと言ってよいとさえ思われる、女性の公的売春が始まった。王の妃たちと死者の未亡人だけが例外とされた。

During the time I resided with Davis, Terremytee, the king's brother, died.... The public mourning that took place on this occasion was of so extraordinary a nature, that, had I not been an eye-witness, I could not have given credit to it.

The natives cut off their hair, and went about completely naked. Many of them, particularly the women, disfigured themselves by knocking out their front teeth, and branding their faces with red hot stones, and the small end of calabashes, which they held burning to their faces till a circular mark was produced; whilst, at the same time, a general, I believe I may say an universal, public prostitution of the women took place. The queens and the window of the deceased alone exempted. (Campbell, 99-100)

20世紀の研究では、ここで描写されている儀式における行動は死に対抗するための踊りや行為であると考えられており、生殖行為の模倣がそうした儀式の一つとして行われていたと説明されている<sup>24</sup>。しかし本来の呪術の意味がキャンベルが目撃した時点でどの程度保持されていたかは不明である。この出来事について尋ねられたカメハメハは、こうしたことは決まっていること(“the law”)であり、彼にも止めることはできない、と答えたという<sup>25</sup>。

バンクーバーとキャンベルの記録はハワイの人々が当時どのような環境に置かれていたかを間接的に教えている。彼らはヨーロッパ人たちの訪問に生活を乱され、一方で伝統的な呪術的儀式を続けていた。そしてそれらが観察された時から、おそらく短い間に多くのことが急速に変化した。上記引用の下線にあるように、バローはバンクーバーの記述の2つの異なる文から単語を抜き取り、「不快なほど顕著な猥褻さ」(“offensively conspicuous wantonness”)というフレーズを合成した。キャンベルの旅行記からは「公的売春」(“a public prostitution”)というセンセーショナルなフレーズだけを取り出し『ブリタニカ』に書き入れたのである。これらの記述は第7版で内容が改訂されたあとも同じように記載され続けた。第7版ではバローは主にコツェブーの1823年から1826年までの旅行記を参照し、ハワイの王室について記述しているが、宣教師たちによってスペリング・ブックが配られ、教育が行われて人々の道徳が向上しているといった話が、加筆部分の中心となっている。

1820年代、ハワイとイギリスの間に起こった重要な出来事はカメハメハ2世のイギリス訪問である。補遺版では、カメハメハ2世は次期国王として望みが持てない怠け者の若者として描かれているが、第7版ではその個所は削除され、代わりに彼が王位に就いた後のイギリス訪問、およびロンドンでの死が簡単に紹介されている(*Supplement*, 286; EB, 7th., 321)。カメハメハ2世は、バンクーバーと父カメハメハ1世との間で交わされた、ハワイのイギリスへの委譲の公約について、イギリス側に再度申し入れることを考えていたようである<sup>26</sup>。これに対してイギリス政府および海軍は、念入りの準備をして臨んだ。バイロン船長(George Anson Byron, 1789-1868)に親書を持たせ、クック、バンクーバー、コツェブーなどの旅行記を参考書として与えた。親書には、イギリスはハワイに初めて上陸したヨーロッパの国であり、ハワイは実際に公式に委譲されたのであるから、イギリスは統治の権利を持っているが必ずしも現在即刻現実化することは必要ではなく、今後どうするかは現地の為政者の考えを尊重す

る、といったことが書かれている<sup>27</sup>。果たしてバイロン船長は任務を無事遂行し、王の亡骸をハワイに送り届けた<sup>28</sup>。第7版の記述には、イギリスのハワイ統治についての何らかの言及は一切ない。なぜカメハメハ2世がイギリスに来たのかもわからない。項目の最終部分では、キリスト教の布教により道徳的に向上した女性たちは、「かつてのようにもはや英国の船に売春に通ってきたりしない」(“the females no longer, as formerly, resorted for prostitution to British ships,” EB, 7th, vol.18, 321)、とおまけのように書き添えられている。

## 5. ジョン・バローの歪んだハワイ

次には、バローの記述が女性の性的猥雑さを殊更に強調する背景について、当時の状況を勘案して若干の考察をしたい。バローのイギリス海軍での職は、海軍本部事務次官(Second Secretary to the Admiralty)である。彼はこの職を1804年からほぼ40年間務めた。1820年代から30年代にかけて、彼が『ブリタニカ』の記述をした頃、バローは海軍の司令塔の一人として、クックが第3回航海で果たせなかった北西航路の発見に力を入れ探検隊を送り出していた。彼は保守系の『四季評論』(*Quarterly Review*)に生涯200以上の記事を寄稿したが、北西航路探検の推進者として国家的利益のために筆を振っていたといわれている<sup>29</sup>。北西航路についての懐疑的な見解は常に存在しており、世論を醸成するという意味でも執筆活動には意義があったのだろう。補遺版の執筆を依頼されたとき、法外な執筆料を支払う出版者を、バローがどのように思ったかはわからないが、海軍関係やアジア、オセアニア、太平洋地域など地理的な事項について、20以上の項目を執筆している。彼の著述した内容は膨大であり、ポリネシアはそのうちの一つにすぎず、記載内容については一切任されていたと考えられる。ハワイについてバローの好きなように記述できたのであれば、海軍の中枢部にいるという立場からみてイギリスの利益になる、もしくは不利益にならないと考えられることを記述したと考えるのが妥当だろう。それでは先に検討したハワイの女性たちの淫猥さについての言及はなぜなのか。

ハワイはキャプテン・クックが現地の人間に殺された場所である。『ブリタニカ』第3版のジェイムズ・クックの項において詳細に描かれた彼の生涯のクライマックスは、ハワイにおいて彼が殺されるに至った場面である。農夫の子として生まれ商船の船乗りになり、海軍に入隊するまでを短く紹介し、3回の世界一周航海について詳細に述

べた後クックが死に至る数日間のハワイでの出来事がズームアップされるという、この劇的な評伝の構成は、アンドリュー・キップス (Andrew Kippis, 1725-1795) による初めての『クック伝』(*The Life of Captain James Cook*, 1788)において展開した。キップスの『クック伝』は、クックの伝記の定番として19世紀を通じて読み続けられた。19世紀のイギリスの人々は、キップスの語るクックの物語に国民的英雄の姿を見たと考えられる<sup>30</sup>。好奇心のある人間であるなら、何故この英雄的人物が殺されなければならなかったかという理由を誰しも知りたいと思ったであろう。

先に紹介したピンカートンは『近代地理学』で、クックが殺されたのは「残虐さのためではなく、突然起こった不当な憤怒の衝動」(“not owing to ferocity, but a sudden impulse of undeserved resentment,” vol.2, 500)のためであると述べている。こうした解釈はおそらくある程度流布していたと考えられるが、ここで問題となるのは、それではなぜそうした現地人の突発的な暴力行動から身を守る方策が取られていなかったのかということである。太平洋の島々にヨーロッパ人が上陸するようになると、何らかの偶然や小競り合いの結果、命を落とす船員たちもいれば殺されてしまう現地の人々もいた。命のやり取りは決して非常に珍しいことではなかった。そして正式の航海誌のみならず、クックと同船した海軍の人々が記録を公開した後となっても、何故命を落とすようなことになったのか、別な言い方をすればどうすれば回避できたのか、論理的な説明は得られないままである。クックが殺されたのは1779年2月、北極圏に向けて出発後すぐにマストの不具合によって引き返さなければならなくなったそのあとである。イギリス海軍のドックにおける整備の問題を指摘する声も現在ではある<sup>31</sup>。しかし何故クックが、ハワイの群衆が騒然とする暴動に近い状況の下にいなればならなかったのかについての十分な説明はなされていない。

歴史家のスコット・アシュレー(Scott Ashley)はクックの第3回航海に同行した船員たちの出身地や海軍での階級について分析し、彼らの残した航海誌の内容で共通しているのは、その書き手の海軍での階級を踏まえた将来展望への思考が影響した記述になっていることであると指摘している<sup>32</sup>。自らがクックの死の責任を負う状況にはならないように注意して、彼らは航海誌を書いたというのである。彼らは上官であるクックを失った後、自分たちの昇進や経済的保障の決定には誰が関わるようになるのかについてしごく敏感であった。それで

はバローの場合はどうなのだろうか。補遺版の執筆時期はクックの死からすでに40年近くが経っており、当時海軍に在籍した人々もすでに去っていた時期である。しかしイギリス海軍の正当性を主張すべきバローの立場からすれば、ピンカートンのように「突然起こった不当な憤怒の衝動」でクックが死に至った、という説明はいかにもよくないと考えられたであろう。そうしたことは予見しうるからである。少なくともイギリス海軍の船長をそのような突発事故で亡くすようなことがあってはならない。そして海軍に落ち度がないとするならば、ハワイの人々を非難することで説明したかのように筆を進めるという行き方もあるだろう。バローは乞われて筆者になったのであり、彼の地位と名声を『ブリタニカ』が執筆者として欲したのであれば、彼が編者のネイピアにさして気兼ねする必要はない。バローの文章は、性的な逸脱や異常と受け取られる慣習についての言及が地理的項目の中にランダムに現れている。結果、この文章を読む一般の人々の理解は混濁したであろうし、論理的な思考への道が阻害されることになってもおかしくない。圧倒的に男性が多かったと思われる百科事典の読者に向けて、船乗りと言えば女性という世俗的な関心をくすぐるように、彼の文章はハワイの女たちの描写で読者を煙に巻いている。

カメハメハ2世のイギリス訪問についてバローは至極簡単に触れただけであるが、それはバローの関心がすでにハワイから後退していたことが影響しているとも考えられるだろう。北西航路探検が次々と失敗に終わる中、イギリスから北極海を経て太平洋に抜ける航路は発見できず、その間アメリカは西部へと領土を広げていた。地政学的にみてハワイの利権はイギリスよりもアメリカにあった。クックの第3回航海において、カナダ北西沖で捕獲したラッコの毛皮が中国で非常に高値で売れることが分かると、ヨーロッパ各国は競争して毛皮の採取と貿易に参入した。そのためカナダ北西沖に入る漁船は増加し、毛皮を求めて漁をした船団が、マカオに向けて取引に行く途中の寄港地として、ハワイにはヨーロッパの船が停泊するようになった。ハワイに自生するビャクダンの木(sandalwood) が中国で高値で売れると分かると、カメハメハ1世はアメリカ商船と独占契約を結び、ビャクダンの輸出をして利益を上げた<sup>33</sup>。太平洋における捕鯨の最盛期は1840年代と言われるが、その間ハワイは捕鯨船の寄港地として大いににぎわうことになる。その時には、ハワイのホノルルにはアメリカの宣教師たちが築いたアメリカ人のコミュニティが立派



に存在していた。アメリカ人の宣教師は、自分たちの信じる神の国の優越性を説いた。そのとき使われたレトリックは、一時は間違っただけで神と崇めた現地の人々に、自らの無分別と自信過剰により殺されたキャプテン・クックがハワイにもたらした深い傷を、キリスト教の神が救う、というものだった<sup>34</sup>。

## 6. おわりに

以上、ここまで『ブリタニカ百科事典』の第3版、第4, 5, 6版の補遺版、および第7版のハワイに関する内容について考察してきた。第3版で描かれたハワイは、その出典にいささか問題はあっても、一種の太平洋の楽園として紹介されているとみてよい。そこでクックの死が殊更掘り下げられることはない。しかし補遺版および第7版におけるジョン・バローの描くハワイは、情報が増え、カメハメハ1世も登場し、現地の人々の信仰などにも言及されてはいるものの、その資料の利用や内容の選別において、特にハワイの女性たちや風俗信仰について、偏向した記述となっている。何故こうなったかについての直接的資料はないため、本稿での考察は状況から考察しうる範囲に留まるものであるが、カメハメハ2世のロンドンでの死去に際してのイギリス海軍の態度が示すように、ロシアやアメリカが利権を求めて近づいていたハワイに対して、何らかの明確な態度で臨むことはむしろ政治的に好ましくない状況だったと考えられるだろう。『ブリタニカ』の出版者であったカンスタブルのイギリスの知性の結晶としての百科事典の理念は、ハワイの記述に関しては、イギリスのお家事情で歪まざるをえなかったということだろうか。ハワイの人々の歴史や自然の中で、「権威を帯びた知識」の編集から除外されたものには、現在に至るまで語られない空白として置き去りにされたものが多いはずである。

本稿では『ブリタニカ』におけるジェイムズ・クックの項目について十分論じることができなかった。イギリスの文化的コンテストにおいて、ハワイはキャプテン・クックと不可分の関係であるが、現在でもクックの評価については研究者の間で意見の相違があり、彼のハワイでの死についても定見は形成されていない。本稿で簡単に紹介したキップスの『クック伝』は、20世紀以降の歴史学や文化人類学ではほとんど取り上げられていないが、イギリスの人々に英雄としてのクック像を提供した優れた伝記として考察されてよいものである。アメリカの宣教師たちが作り上げた征服者としてのクック像や、20世紀以降の文化人類学にも見られるハワイの土着信仰に基づいたクック

の殺害の理解から自由である点において、キップスの『クック伝』に加えてバンクーバーの旅行記も、再考されるべきものだろう<sup>35</sup>。

(本稿は日本学術振興会科学研究費助成事業(基盤研究 C 18K00423)によるものである)

---

<sup>1</sup> 本稿における「イギリス」であるが、1800年の Acts of Union によってアイルランドが併合されたため、19世紀までの記述においては United Kingdom of Great Britain、19世紀の記述においては United Kingdom of Great Britain and Ireland である。ただし文脈によっては、「イギリス」は自治領や保護国等を含む大英帝国と解することも可能な場合がある。

<sup>2</sup> イギリス・ロマン主義研究において、知識を百科として編集する営為をロマン主義における現象としてとらえた研究は、筆者の知る限りない。この点において本論文は、ロマン主義研究の射程を広げる意図を持ち、ハワイを事例として考察したものである。

<sup>3</sup> フォリオ(folio)は本のサイズであり、印刷紙一枚を1回折って製本したものの。最も一般的な大きさは、製本時の高さ 38 センチ程度のものである。『ブリタニカ』は一冊が 800 ページほどあるものが多く本の厚さも 15 センチ以上ある場合がある。

<sup>4</sup> 第3版は『ブリタニカ百科事典』の出版者であった Colin Macfarquhar が編集を行っていたが、完成前の 1793 年に死去し、そのあとの編集は聖職者であった George Gleig が引き継いだ。Gleig は 1801-1803 に、第3版の *Supplement* (2vols.) を発行している。

<sup>5</sup> Kalker et al. (eds), *The Early Britannica*, 2-3, 157, 特に編集形態については 165-172 参照。

<sup>6</sup> 本論における日本語訳はすべて筆者による。

<sup>7</sup> 同様にイギリス海軍の許可なく公式版より早く出版されたものに、John Rickman や John Ledyard の航海誌などがある。Beaglehole, *The Journal*, 1, ccv-ccix 参照。イギリス海軍が任命した編集、執筆グループによって出された第3回航海誌の公式版は、1784年のジョン・ダグラス (John Douglas) 編集による『太平洋航海記』(*A Voyage to the Pacific Ocean*)であり、3巻のうち1, 2巻はクックが執筆し、3巻はジェイムス・キング船長がクック死後の行程を記した。

<sup>8</sup> サムエルは次のように書いている。“the greatest part of it [Ellis’s *Voyage*] was written from Memory, he tells no Lies ‘tis true but then he does not tell you half the odd adventures we met with; it is an unentertaining outline of the voyage.” Beaglehole, *The Journal*, 1, ccvii.

<sup>9</sup> カメハメハ1世はハワイをイギリスに割譲 (“cede”)することを認めたが、当時諸島統一を未だ成し遂げておらず、イギリスの援護は他部族を制圧するために必要だったのではないかと考えられる。なお、バンクーバーの航海記に残されたハワイの見聞記は細密であり、カメハメハとの交流は親密で友情のようなものさえ読み取れる。

<sup>10</sup> バンクーバーは帰国後、Thomas Pitt などのマスコミを巻き込んだキャンペーンにより暴力的な船長として糾弾されたが、それは主に Pitt が航海中何度か鞭打たれたことによる私怨がもとになっている。ピットは貴族階級であり首相 William Pitt の親戚であった。王立協会会長でクックの第1回航海に同船した Joseph Banks は、階級意識を背景としたバンクーバーへの屈折した

敵意をもっていたが、このことも事態を悪くした Bown, 220-233 および Vancouver, 1, “Introduction,” 226-240 に解説がある。Banks の階級意識については Gascoigne, 38 参照。バンクーバーの航海記が W. Kaye Lamb によって注釈、編集され、1984 年に出版されたあとは、Bown のバンクーバー伝など、彼を再評価する研究も現れている。

<sup>11</sup> 第4版の編集は James Millar が行った。彼は医学を修め科学全般に造詣が深く、第4版の記事も多く書いたといわれているが、彼の編集期間に売り上げが落ち込んだこともあり、編集者としての評価は低い。

<sup>12</sup> 18世紀後半まで、「長いs字」(the long s)と呼ばれる、Jに似た活字が小文字のsとして利用されていた。第6版ではこの活字を廃し、現在と同様の活字体となった。

<sup>13</sup> 補遺版の編集方針およびネイピアについては、Yao, 255-264 に詳しい。

<sup>14</sup> この補遺版には“Preliminary Dissertations”と呼ばれる長文の学術的論考が巻頭に収められており、第1巻では哲学者デュガルド・スチュワート(Dugald Stewart, 1753-1828)の論文が掲載された。なお、カンスタブルは寄稿者に驚くほどの高い原稿料を払ったといわれているが、1820年代のイギリスにおける不況も影響し、巨額の負債を抱えることとなり、1826年に破産した。“Archibald Constable,” by David Hewitt, *Oxford Dictionary of National Biography* 参照。

<sup>15</sup> 著名人を執筆者に迎えることについて、Yao は、“A famous name, it seemed, was worth more than any careful plan of contents”(259)と述べている。

<sup>16</sup> バローは、コツェブーから直接ハワイの様子を直接聞いている。Forbes, 330 参照。

<sup>17</sup> 『ロンドン百科事典』のハワイに関する記述は「サンドウィッチ諸島」(“Sandwich Island”)の項目にあり、1827年8月の出来事が記載されているため、その時期から出版された1829年までの間に書かれたと考えられる。著者は不明であるが、ハワイがイギリスに委譲されているのでイギリスの領土(“property”)であると書かれていること、イギリスの優れた統治(“the supremacy of the English government”)に言及があり、アメリカの宣教師団への批判がみられることなどから、イギリス人でハワイに渡った宣教師かそれに近い人物が記述したと考えられる。ハワイの自然や作物についての記述が詳細で、ハワイの人々に対する差別的な表現は全く見られない (vol. 19, 279-285)。

<sup>18</sup> ポリネシアの用語の詳細については、Arvin, 37 参照。

<sup>19</sup> 当時の地名および地域は、必ずしも現在の行政区域等と重なっていない。本稿では日本語訳は、『ブリタニカ』本文の記載内容を適宜参考にした。

<sup>20</sup> 「ポリネシア」の項目のテキストは、EB, *Supplement*, vol. 6, 279-292, および EB, 7th, vol. 18, 315-329 にある。

<sup>21</sup> 補遺版でも40万人という説があることは書かれている。アメリカの宣教師 Henry T. Cheever は、ハワイ島の北部のさびれた地域に、広大な畑地であったと考えられる囲い地と寺院や墓所の遺跡があることを報告している。またクックが来訪したあとに大規模な疫病の流行が記憶されていることなどから、ハワイ島の人口減少は深刻なものであったのではないかと推測している。また、当時の人口は10万人を少し上回るくらいであると述べられている。Cheever, 1850, 61。

<sup>22</sup> Kotzebue や Vancouver の旅行記を参照。バローの記述は女性たちの仕事や子育てなど日常生活を完全に看過している点において際立っている。

<sup>23</sup> スミスによる序文を参考のこと。Campbell, 7-12。キャンベルはカナダ北西部を航行中に両足が凍傷になり、治療のためハワイに退避し1年ほど過ごした。両足をなくしたキャンベルは、帰国後スコットランドのクライヴ川の遊覧船で音楽を奏でて生計をたてるなどしていたが、そこでスミスと出会い、旅行記が出版されることになった。文中の“Davis”は Isaac Davis(c1758-1810)

である。ハワイでカメハメハに敵対する首長により彼の船員が皆殺しにあったとき、たった一人生き延び、カメハメハの軍事顧問としてハワイの統一を助けた。Kuykendall, 24-25 参照。

<sup>24</sup> Costa, 114 参照。

<sup>25</sup> キャンベルの原文は次のようになっている。“When the captain of a ship that lay in the harbor remonstrated with the king upon these disgraceful scenes, he answered that such was the law, and he could not prevent them (Campbell, 100).”

<sup>26</sup> Kuykendall は、当時のロンドンの新聞が、“the King of the Sandwich Islands has come to England for the purpose of placing his dominion under the protection of Great Britain, in consequence of his apprehending some hostile intentions on the part of Russia.”と報じたと書いている(77)。

<sup>27</sup> この親書の内容は、Kuykendall, 81 にある。

<sup>28</sup> Kotzebue, *A New Voyage*, 2, 151-266 には、この時期のハワイの様子、およびハワイに到着した王の棺やその際の儀式が報告されている。カメハメハ 2 世と妻の死亡原因は麻疹である。

<sup>29</sup> バローの業績については、J. M. R. Cameron, “Barrow, Sir John, first baronet,” *Oxford Dictionary of National Biography* を参照。北西航路は北極圏の海域を通過してイギリスから太平洋(もしくはカナダ北西部から大西洋)に抜ける仮説上の航路であり、もし発見できればアジアへの最短航路となると目されていた。

<sup>30</sup> 18 世紀末のクックの評価は、優れた航海術や科学的発見によるものが多く、太平洋の島々の発見における先取性が第一義であるとは必ずしも捉えられていなかった。

<sup>31</sup> McLynn, 286 参照。破損した船は Resolution である。出発したころから雨漏りがしていた。

<sup>32</sup> Ashley の指摘は次の通りである。“The contradictions, uncertainties and obscurities on our accounts of Cook’s death are not random: there are patterns to them, and those patterns were determined by, and in some cases were part of, the different interest each journalist allied himself with as part of the great game of advancement in the Georgian navy. Those who attacked [John] Williamson did not do so primarily because they thought him a bad man who hated Captain Cook ... and who deserved to be punished for his actions. They attacked him because he was the most convenient way of deflecting any suspicion of blame away from themselves (125).

<sup>33</sup> “Sandalwood trade,” HawaiiHistory.org および、Kuykendall, 50-51 参照。

<sup>34</sup> American Board がハワイに送った宣教師は非常に多数に上る。Cheever に、こうしたレトリックの実例がある(62)。クックについて殊更に尊大な人物であると語り、キリスト教への帰依を勧めなかったことを欠点のように語る際には、ハワイはイギリスによって「発見」されたという事実に伴う専権事項を否定するための政治的な含意もあると考えられる。違う見方をすれば、クックを殊更非難することで、宣教師たちはハワイの領有を主張しているのである。

<sup>35</sup> Sahllins の *Islands of History* や *How “Natives” Think* において論じられる、クックを Rono (神) と見るハワイの人々の理解と、そうした見解に対立する Obeyesekere の議論があるが、そこで重要な文献として登場する宣教師の William Ellis による *Polynesian Researches* のテキスト批判が行われていないのは不思議である。Ellis は 1822 年から 2 年間ハワイに滞在したが、後にクックと Rono 神の記述などを “research” として出版する背景に、権威としてのハワイ文化の理解者の地位が、布教行為の正当性を示すために有益であったことは間違いない。

<略語>

EB 3rd.: *Encyclopaedia Britannica*. 3rd edition.

*Supplement: Supplement to the Fourth, Fifth and Sixth Editions of the Encyclopaedia Britannica*.

EB 7th.: *Encyclopaedia Britannica*. 7th edition.

<参考文献>

Arvin, Maile Renee. *Possessing Polynesians: the Science of Settler Colonial Whiteness in Hawai'i and Oceania*. Durham NC: Duke University Press, 2019.

Ashely, Scott. "How Navigators Think: the Death of Captain Cook Revisited." *Past and Present*, 194 (2007), 107-137.

Beaglehole, J. C. (ed.) *The Journal of Captain James Cook: the Voyage of the Resolution and Discovery, 1776-1780*. Vol.3, 2parts. Cambridge: Hakluyt Society, 1967.

---. *The Life of Captain James Cook*. Stanford: Stanford University Press, 1974.

Bown, Stephen R. *Madness, Betrayal, and the Lash: The Epic Voyage of Captain George Vancouver*. Vancouver: Douglas & McIntyre, 2008.

Campbell, Archibald. *A Voyage Round the World, from 1806 to 1812*. Ed. James Smith. Second American Edition. New York, 1819.

Cheever, Henry T. *The Island World of the Pacific*. Glasgow, 1851.

Cook, James. *A Voyage to the Pacific Ocean in the Years 1776, 1777, 1778, 1779, and 1780*. Ed. John Douglas. 3vols. London, 1784.

---. *A Voyage towards the South Pole and round the World. In the Years 1772, 1773, 1774, and 1775*. 2vols. London, 1777.

Costa, Mezeppa. *Dance in the Society and Hawaiian Islands as Presented by the Early Writers, 1767-1842*. M. A. thesis, University of Hawaii, 1951.

Ellis, William. *An Authentic Narrative of a Voyage Performed by Captain Cook and Captain Clarke*. 2vols. 2nd ed. 1782 ; London, 1783.

Ellis, Rev. William. *Polynesian Researches*. Vol. 4, From the latest London Edition. New York, 1833. *Encyclopaedia Britannica*. 3rd edition. Eds. Colin Macfarquhar, et.al. 18vols. Edinburgh, 1788-1797. *Encyclopaedia Britannica*. 7th edition. Ed. Macvey Napier. Edinburgh, 1830-1842.

Forbes, David W. (ed.). *Hawaiian National Biography 1780-1900, Vol I 1780-1830*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 1999.

- Gascoigne, John. *Joseph Banks and the English Enlightenment: Useful Knowledge and Polite Culture*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- HawaiiHistory.org. <http://www.hawaiihistory.org/index.cfm?20191228>
- Hawkesworth, John. *An Account of the Voyages Undertaken for Making Discoveries in the Southern Hemisphere*. 3 vols. London, 1773.
- Kafker, Frank A. et al. *The Early Britannica*. Oxford: Voltaire Foundation, 2009.
- Kippis, Andrew. *The Life of Captain James Cook*. London, 1788.
- Kotzebue, Otto von. *A Voyage of Discovery, into the South Sea and Beering's Straits, for the Purpose of Exploring a North-East Passage, Undertaken in the Years 1815-1818*. 2 vols. London, 1821.
- . *A New Voyage round the World, in the Years 1823, 24, 25, and 26*. 2 vols. London, 1830
- Kuykendall, Ralph S. *The Hawaiian Kingdom: 1778-1854 Foundation and Transformation*. 1938; Honolulu: University of Hawaii Press, 1965.
- Ledyard, John. *A Journal of Captain Cook's Last Voyage to the Pacific Ocean*. Hartford, 1783
- London Encyclopaedia, The*. Ed. Thomas Curtis. 22 vols. London, 1829.
- McLynn, Frank. *Captain Cook: Master of the Seas*. New Haven: Yale University Press, 2011.
- "Notice of Archibald Campbell," *Analectic Magazine*, Philadelphia, 1819, 498-501.
- Obeyesekere, Gananath. *The Apotheosis of Captain Cook: European Mythmaking in the Pacific*. Princeton: Princeton University Press, 1992.
- Oxford Dictionary of National Biography*. Online edition. <https://www.oxforddnb.com/20200113>
- Pinkerton, John. *Modern Geography*. 2 vols. London, 1802.
- Rickman, John. *Journal of Captain Cook's Last Voyage to the Pacific Ocean*. London, 1781
- Sahlins, Marshall. *Islands of History*. Chicago: University of Chicago Press, 1985.
- . *How "Natives" Think*. Chicago: University of Chicago Press, 1995.
- Supplement to the Fourth, Fifth and Sixth Editions of the Encyclopaedia Britannica*. Ed. Macvey Napier. Edinburgh, 1824.
- Vancouver, George. *The Voyage of George Vancouver 1791-1795*. Ed. W. Kaye Lamb. 4 vols. London: Hakluyt Society, 1984.
- Yeo, Richard. *Encyclopaedic Visions: Scientific Dictionaries and Enlightenment Culture*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.